

平成22年度都市歴史研究室シンポジウム「江戸の町名主」

実施記録および関連事業概要

平成23年（2011）2月19日、都市歴史研究室では、シンポジウム「江戸の町名主―町の仕組みと名主の生活―」を開催した。本稿は、本シンポジウム、およびそれに関連する事業の記録である。

1. シンポジウム実施記録

開催趣旨

寛永期（1624～44）に300町ほどであった江戸の町は、18世紀中頃には1,600町余となった。江戸時代を通して町をおさめた名主たちは、町奉行所や町年寄と、町の人びととの間にあって、さまざまな役割を果たした。本シンポジウムでは、名主の役割を時期的な変化に着目して検証するとともに、文化活動や経済・金融など正規の職務以外の側面にも注目することで、名主の特質や江戸町方社会の仕組みについて考える。

事業報告

（1）平成22年度東京都江戸東京博物館都市歴史研究室シンポジウム

「江戸の町名主―町の仕組みと名主の生活―」

①日 時：平成23年2月19日 13時～17時

②会 場：東京都江戸東京博物館 1階ホール

③構 成

趣旨説明

- ・高山慶子（東京都江戸東京博物館）

個別報告

- ・片倉比佐子（近世史料研究会）「名主の由緒に見る江戸の町政」
- ・加藤 貴（早稲田大学）「名主惣寄合と町方の合意形成—18世紀を中心に—」
- ・小林信也（川村学園女子大学）「近世末期における名主の都市官僚化」
- ・牧野宏子（関東学院大学）「浅草福富町名主と文人たち—永野又次郎宛書簡より—」
- ・高山慶子「名主の経済事情と金融」

パネルディスカッション

- ・司会：高山慶子、パネリスト：片倉比佐子、加藤貴、小林信也、牧野宏子

④参加人数：328名

2. シンポジウム関連事業概要

（1）シンポジウム「江戸の町名主」関連講座「江戸町名主の明治」

シンポジウムは江戸時代の町名主を対象としたが、本講座では江戸から東京となった明治以降の町名主の動向について、牛米努氏に講演を依頼し、シンポジウム開催前に「えどはくカルチャー」で講座を実施した。

- ①講 師：牛米 努（税務大学校租税史料室研究調査員）

- ②日 時：平成23年2月17日 14時～15時30分

- ③会 場：東京都江戸東京博物館 1階会議室

- ④参加人数：116名

（2）特集展示「江戸の町名主」

- ①展示担当：高山慶子

- ②開催期間：平成23年1月25日～3月11日

※会期は3月27日までの予定であったが3月11日に発生した東日本大震災により12日以降は休館となり、展示は11日で終了した。

- ③会 場：東京都江戸東京博物館 常設展示室5階「町の暮らし」コーナー

- ④展示内容：東京都江戸東京博物館が所蔵する4家の名主の資料を手がかりに、名主の役割や性格をさまざまな側面から考える展示を行った。展示資料は以下の通りである（それぞれの資料説明は展示キャプション〔一部改変〕）。

※東京都江戸東京博物館の名主関連資料については、本報告書の口絵、および「東京都江戸東京博物館所蔵 江戸の町名主 資料目録」（本書133～161頁）を参照のこと。

⑤展示キャプション

・雉子町名主斎藤月岑関係資料

- ・類聚撰要 全51冊 90373070～89、90374697、90375420～49【口絵5】

天保2年(1831)12月序、弘化2年(1845)12月写

斎藤幸雄・幸孝・幸成(月岑)編著、沓番組世話掛木村定次郎・普勝伊兵衛政豊写

名主の斎藤月岑が祖父・父・月岑の三代で完成させた記録(写本)。町屋敷(土地)、人別(戸籍)、町入用(町の費用)など、さまざまな記事が内容ごとにまとめられている。名主自身が職務を行う際の参考にするために編纂したと考えられ、名主は町の人びとの生活全般に関係していたことが知られる。

- ・江戸名所図会 全20冊 90004855～74

天保5年(1834)・同7年(1836)刊

斎藤幸雄・幸孝・幸成(月岑)編著、長谷川雪旦画

『類聚撰要』と同じく、名主の斎藤家が親子三代で編集した江戸の名所記。さまざまな江戸の名所を、斎藤家三代による解説と、画家の長谷川雪旦の挿絵で、わかりやすく説明する。文化人・斎藤月岑の代表作の一つで、現在でも文庫本(角川文庫・ちくま学芸文庫)として刊行されるなど、広く親しまれている。

- ・武江年表 全8冊 96200794～0801

嘉永2・3年(1849・50)刊

斎藤月岑著

江戸の政治・社会・文化に関する総合年表。正編8巻、続編4巻。正編は天正18年(1590)から嘉永元年(1848)までを収録し、江戸の版元・須原屋らによって刊行された。『江戸名所図会』同様、『武江年表』も文庫本(ちくま学芸文庫)などとして、現在まで広く読み継がれている。

- ・武江年表草稿 全2冊 86213041・42【口絵4】

(文久元年(1861)～慶応3年(1867))、(明治元年(1868)～明治6年(1873)) ※年代は収録内容
斎藤月岑作成

『武江年表』の続編は、嘉永2年(1849)から明治6年(1873)までの内容を収録し、月岑没後の明治15年(1882)に出版された。展示資料は月岑直筆の草稿で、細かな推敲の跡に月岑の執筆への熱意が伝わる。

- ・安政見聞誌 全1冊 01002293

安政2年(1855)以降

斎藤月岑編著

安政2年(1855)10月2日、江戸では大地震が発生した。本書は地震後間もない頃に月岑がまとめた記録(写本)で、震災の様子を記録し、後世に伝えようとする月岑の思いが感じられる。

・檜物町名主星野家文書

- ・万さい工之覚帳 90204554【口絵7】

延宝5年(1677)正月

星野又右衛門作成

ます(杵)などの木工品の細工に関する資料。これは星野又右衛門が檜物大工棟梁であった頃の記録と

考えられ、名主の仕事に専念する以前の様子を物語っている。江戸の名主の古文書は、江戸時代後期に作成されたものが多く、江戸時代前期の資料は大変貴重である。

・（名主役替手形控） 90204555

宝永元年（1704）3月18日

檜物町壺丁目・式丁目

名主役が親から子へと引き継がれたときの記録。江戸の名主は世襲であり、同じ家が代々名主をつとめたが、幕府が正式に世襲を認めていたのは草分名主に限られる。本資料には「草分ケ之名主」（くさわけのなぬし）とあり、草分名主の名称を古文書で確認できる古い事例である。

・役儀御免願并家督願右一件ニ付書留 90204557

天明3年（1783）3月

これも名主役の相続に関する資料。本資料の中に、「草分御同役衆、例年之通御寄合」とあり、草分名主たちは毎年、寄合を開いていたことがわかる。星野家が家督を親から子へ譲った披露目として、「まんちう」（饅頭）、「よふかん」（羊羹）などが寄合で配られたことなども記されている。

・大伝馬町名主馬込家文書

・絹戻上 浅黄葛袴 藍白地革（蹴鞠御門弟装束着用免状） 09000509

安永3年（1774）12月26日

難波家 河村伊織・小森主膳作成

絹戻上（^{きぬもじ}絹緞の^{すいかん}水干）、浅黄葛袴（浅黄色の^{くすばかま}葛袴）、藍白地革（藍白地革の^{しとうず}下沓〔沓の下にはく一種の足袋〕）は、蹴鞠の装束。難波家は蹴鞠の家元（ほかに飛鳥井家がある）。本資料は蹴鞠の門弟としてこれらの装束の着用を馬込勘解由に許可したものである。

・【参考資料】東海道名所絵 東海道之内京 大内蹴鞠之遊覧 95200142（馬込家文書ではない）

文久3年（1863）6月

歌川芳盛画

蹴鞠（しゅうきく・けまり）とは、古代以来、主に朝廷や公家の間で行われた競技。皮の沓（くつ）をはいて、鹿皮のまりを足の甲で蹴り上げ、地に落とさないように受け渡しをする。江戸時代には、武家のほか、上層の町人や農民も、歌道や茶道とならぶたしなみとして、蹴鞠に興じたことが知られている。

・借用申金子之事（越中守家中救助につき金500両） 99200611

文久3年（1863）12月

元メ添役 平山五左衛門ほか作成

宇都宮藩の戸田家が家中の窮乏を救済するために、馬込勘解由から500両を借用したときの証文。戸田家は7万7800石の譜代大名。このときの借金は、借金に借金を重ねたもので、奥書を合わせると家老以下31名の藩士が署名をして、必死の歎願をしている様子がうかがえる。

・（借入金返済約定につき戸田越前守証文） 09000687【口絵3】

元治元年（1864）7月

越前（宇都宮藩主戸田忠恕）

この証文の差出人である「越前」とは、宇都宮藩主の戸田越前守忠恕。これは戸田忠恕が領内でとれる年貢米で借金を返済することを約束したもの。借り手の大名に対して貸し手の馬込勘解由は尊称なしで小さく書かれ、見かけ上は当時の身分のあり方を示しているが、大名本人の証文をとりつけた名主の力を物語るものともいえる。

・借用申金子之事（62642両）99200620

慶応3年（1867）12月

金奉行 平山五左衛門ほか作成

3年前の元治元年（1864）に大名自らが返済を約束したにもかかわらず、宇都宮藩戸田家の馬込勘解由に対する借金は、元利合わせて6万2642両に膨れあがっていた。仮に1両を10万円とすると、現在の62億円余ということになる。馬込家は巨額の資金を戸田家に融通していたことが知られる。

・証文之事（大伝馬町二丁目沽券状にて金200両用立）99200590

天保12年（1841）11月

小津清左衛門店支配人 藤兵衛作成

差出人の小津清左衛門は大伝馬町一丁目の紙問屋。この証文は、馬込勘解由に200両を用立てた担保として、沽券状（土地の売買証文）を預かったことを証する手形である。馬込勘解由は戸田家などに貸す金銭を、支配町内の豪商から借りていたと考えられる。

・浅草福富町名主永野又次郎宛文人書簡

・浅草福富町名主永野又次郎宛文人書簡貼交卷子 甲・乙 02000322・02004845【口絵9・10】

江戸後期

（浅草福富町名主永野又次郎ほか宛）

名主の永野又次郎宛ての書簡集。書簡の差出人として「文晁」（谷文晁）、「鶯^{おうそん}村」（新居を建てた下根岸大塚が鶯村と呼ばれていたことにちなむ酒井抱一の別号）などが確認される。江戸の名主と文化人との交流を示す貴重な資料。

・【参考資料】（パネル展示）蔓梅擬目白蒔絵軸盆・同下絵 91210668・91210669

江戸後期

酒井抱一下絵、原羊遊斎作

（3）「江戸の町名主」関連図書コーナーの設置

上記の展示期間中に、東京都江戸東京博物館7階図書室において、「江戸の町名主」関連図書コーナーを設置した。